国際社会文化研究所紀要　第12号（2010年）

山下義信『真宗の聞き方』について

新 田 光 子*

Book Review; Gishin YAMASHITA, "Shinshu no Kikikata".

Mitsuko Nitta*

"Shinshū no Kikikata", How to Listen to Shin Buddhism, was Published by Gishin Yamashita in 1961.

Yamashita was a shinshu priest and established a home, a school and a temple for atomic bomb orphans in Hiroshima. In this book, we can understand the depth and strength of his religious faith.

はじめに

本稿は，原爆投下直後に「広島戦災児育成所」を開設し，戦災孤児の育成に尽力した山下義信が著した『真宗の聞き方』（善行会，1961年）を紹介するものである。

広島戦災児育成所は，1945年12月，浄土真宗本願寺派僧侶山下義信（1894-1989）が私財を投じて開設し，主として原爆で親を失い孤児となった子どもたちを育てた。1953年，財政上の理由もあって広島市に移管することを余儀なくされたが，それまでに育てた孤児は約170人にのぼる。

山下は，また，1947年から２期６年間にわたって参議院議員を務め，参議院厚生委員長などを歴任した。その間，「生活保護法」，「社会福祉事業法」，「広島平和記念都市建設法」，「戦傷病者戦没者遺族等援護法」，そして「原爆医療法」など，福祉関係の立法に深く関わった。

原爆が投下された直後の混乱した時代に施設を開設し，多くの孤児を育てただけではなく，戦後日本の社会福祉行政に数々の業績を残した山下義信という人物の実践を支えたものは何か，真宗僧侶としての宗教的信念がどんなものであったのか，こうした面での紹介はこれまでほとんどされていない。

山下義信は多くの文章を残しているが，山下の行動をささえた宗教的信念についてはほとんど語っていない。そうしたなかで，『真宗の聞き方』は，山下の唯一の宗教的著作といっていいであろう。書かれたのが「広島戦災児育成所」の運営や議員活動から離れてからの時期であることも，かえって，山下が真宗をどうとらえ，育成所の運営はじめ社会福祉になぜ心血を注いできたかを知るうえでも有益と思われる。「広島戦災児育成所」研究にとっての貴重な文献であり，紹介する意義があると考えた。

＊ 龍谷大学社会学部

1．本書の構成と特徴

本書の構成は，次のとおりである。2部構成，260ページにまとめられている。

序
第1部　聞法のカギ
1．聞法の第一歩
2．ある一人の篤信者
3．南無阿弥陀仏を聞く
4．悪知識と悪同行
5．2つの信心
6．法蔵の扉
7．名号の不可思議
8．菩薩5つの門
9．仏徳をたたえて
10．浄土への願生
11．智恵の水
12．廻向の救い
13．合理的奇蹟
第2部　信仰15章
1．信心
2．信順
3．招喚
4．功徳
5．廻向
6．智慧
7．仏道
8．罪悪
9．因果
10．無常
11．願生
12．信行
13．報恩
14．幸福
15．二諦

2部構成になっているが，第1部と第2部で大きく内容が異なるわけではない。第1部では，「聞法」とはなにかをさまざまな視点から説明し，第2部では信仰の根元にかかわる重要な概念を

説明している。

全体を通して，真宗の基本的な考え方を聖典を引用しながら紹介し，さらに解説を加えるというスタイルをとって，真宗の教えをわかりやすく説明しよとしている。ふりがなをつけたり，漢字や仏教用語の読みと意味を丁寧に説明したり，わかりやすい伝道教化を目指す姿勢は最初から最後までつらぬかれている。

例を挙げよう。

> 阿弥陀仏は一切衆生のために，仏道の修行に精進され，戒（かい，かいりつ），定（じょう，こころをしずめる），慧（え，ちえをみがく）の三学，布施（ふせ，ほどこし），持戒（じかい，かいりつ），忍辱（にんにく，くつじょくをしのぶ），精進（しょうじん，どりょく），禅定（ぜんじょう，こころをしずめあくしんをさる），智恵（ちえ，しんりをさとる）の六度(ど)，正見（しょうけん，ものごとをただしくみる），正思（しょうし，ただしくかんがえる），正語（しょうご，ただしくかたる），正業（しょうごう，ただしくおこなう），正命（しょうみょう，ただしくいきる），正精進（しょうしょうじん，ぜんをはげむ），正念（しょうねん，ただしいことをねんずる），正定（しょうじょう，ただしいちえをみがく）の八正道など，大小二乗を通じ，あらゆる修行につとめられたのである。
>
> その時の名を法蔵菩薩といい，一切衆生の苦に代わって，永劫の修行をすると宣言された。法蔵は高才勇哲であった。無上正真の道意をおこして，一切衆生の苦を抜かんと決意せられた。その志願は高明，その目標は超勝であった[1]。

本書は，真宗の教えについて特に新奇なことを述べているわけではない。読むものを惹きつけるのは，なによりも著者の姿勢であり，語り口である。しかも，言わんとすることは極めて明快である。したがって，本書の内容を言い換えたり，要約したりしても適切な紹介とは言えないであろう。以下では，「序」，第１部，第２部それぞれから例示的に引用する。そのことによって，本書の全体像を推測してもらえれば幸いである。

2．「序」

山下は「序」で，次のように本書執筆の意図を述べている。

> 人生の旅路にて，お念仏に出会ったということは，思いもそめぬ出来事である。どこでどう乗りかえたか，不思議に方角が違ってきた。ありがたいことである。
>
> さまよいの曲折の，そのなかにあった不幸も悲しみも，つぎつぎとかさねた蹉躓も，今では，南無阿弥陀仏を聞きよき糧となって，獲がたき宝とかわったのである。なるほど，ご開山のおおせのように，お念仏は，耳で聞くのではなく，わが人生で味うものであることを，このごろやっと知ることができた[2]。

「序」の最後は次のように締めくくる。

> 近ごろ，思わぬことで，世間のことにかまけ，あたら空しく年月を費やしてしまった。残りすくない露のまも，お念仏に急がねばならぬと思っている[3]。

山下は，社会的に大きな貢献をなしとげ，また社会的にも有名であった。だが，個人的には多くの蹉跌や失意の連続ではなかったかと思われる。そう考えるとき，この一行をどう解釈すべきなのだろうか。

3．「聞法のカギ」

山下にとって，本書の書名にもなっている「真宗の聞き方」がどういうものであったのか。山下にとって，「実践」が「真宗を聞く」ための重要なカギであったことが窺える記述が，第1部「6．法蔵の扉」の下記の個所である。

> 法蔵の扉をひらいて，大慈悲心をいただくのである。扉はカギによってひらかれる。カギは信心である。信心をもって法を聞くことである。信心をもって法を聞くとは，絶体絶命（ぜったいぜつめい，せっぱつまる）の立場で，聞法の座につくということである。
>
> 苦悩と罪業に泣きぬれて，最後によるよりどころは，ひとり仏のおん前である。ここに一道のすくいが残されてあった。絶望する人生に，意外にも，生きる道がもうけられてあった。
>
> 仏ましますことは，かねてから聞くところである。手を合わせ念仏するすがたは，かねてわれらの知るところである。しかしながら，如来の前に跪いて，そのおたすけにすがることは，かつてわれらの夢想せざるところである。しかるに，はからざりき今，仏のみ前にあって救いの声を聞かんとは。この聴聞の座のなかに，いみじくもわれを見出すは不思議である。
>
> わがもとめる救済は焦眉の急である。希望の網はことごとく切れ，精も根もつき果てて，芭蕉のようにおののきながら，この真宗の門に立つものである。聞くは南無阿弥陀仏のおいわれである。諸行無常の鐘の音に，仏のお慈悲を聞くのである。命の網でしっかりとくくられる聴聞である。この網を命の網とたのむばかりである。仏のおしえは真理のおことば，聞くは歎き泣くわたくしの人生である。おことばは真実，真理である。真理がすくいのおことばとなる。
>
> 悲しみのなみだは，いつしかうれしさのなみだにかわる。炎のむねに清涼の風がふきわたってくだされる。絶望のこの眼に，一道の光明がさっと走るのを見る。
>
> わたくしはゆるされて，いだかれることができたのである。念仏があたえられたのである。迷妄のこころがさめて，希望の道がひらかれたのである。勇躍してこの道をすすむことは，聞いたままの実践である。わたくしは運命をかけて，ご信心を実践するのみである。実践によって法を聞くことができる。こうして念仏の人生を歩むことこそ，法蔵をひらくのカギである。
>
> 聞法は信をもって聞くことである。聞き得た法は実践である。実践によって真理の法は光りをいだし，われらはその名号を信心する。これが聞名のカギである。カギを得たわれらは，さらに真宗の極致にすすまねばならぬ。極致とは，他力のご信心は，どのようにしてあたえられるかということである[4]。

4．「仏道は実行である」

第2部の「第7，仏道」でも，「仏道は実行である」として，以下のように「実践」の大切さが述べられている。

> 仏道は実行である。理想はいかに高く，理論はいかに深くても，それだけでは役には立たぬ。仏道は学問ではない。三学（戒，定，慧），四諦（苦諦，集諦，滅諦，道諦），六波羅密（布施，

持戒，忍辱，精進，禅定，智恵），八正道（正見，正思，正語，正業，正命，正精進，正念，正定）など大小二乗を通じての修行も，結局は行為をつつしみ，精神を正しくし，法界のすがたを悟り，真理の智恵を証するために精進するものである。智恵によって，こころの解脱が得られ，生死の苦をまぬかれることができる。仏道修行の人は菩薩である。菩薩の階位は五十二段，まず信をおこし，疑惑をみちびいて理解させ，行によって，経験の智を生み，いよいよ廻向心を磨き，ついで経験以上の仏智にすすむ。思えば仏道はかぎりなき向上の一路，永劫の修行である。わたくしなどには，とうてい思いもよらぬことで，ただ長嘆息のほかはない。さりとて，退けば，奈落に沈むばかりである。

名号聞信の一念に，願行すでに具足して，かならず往生をうる念仏こそ，いかにも横超直道の妙法，希有最勝の真宗である。わたくしの根機にかのうた，ありがたい白道である[5]。

5．まとめ

山下は，広島に投下された原爆により家族を亡くし，生き残った家族も被爆するなど混乱した復員生活のなかで，いち早く原爆孤児救済を思い立ち，実践した。それには，軍隊生活を送る以前からの真宗理解，真宗信仰が大きく関係していたことは，まちがいないであろう。そして，その真宗理解は要するに，ふつうの人間が実践することがカギとなっていた。山下自身が実際に広島戦災児育成所設立・運営をはじめとしたさまざまな活動をおこなってきたのちに行き着いたのが，やはり真宗の教えにとってのカギとなる「実践」を確信するものであったろう。

広島戦災児育成所の指針や目標をみれば，山下が単純な宗教教育ではなく，広い人間性の涵養をめざしていたことは明らかである[6]。毀誉褒貶にさらされながらも自己の信念を貫こうとした山下は，非常にスケールの大きい人物だったように思われる。

ただ，山下個人の心のなかには，常に僧侶として真宗の教えを説きたいという願いがあったのではなかろうか。山下の夢が，広島戦災児育成所のなかに置かれた小さな御堂「童心寺」を寺院として建立し，住職になることであったことは，残された資料からも明らかだからである。もし住職になっていたら，『真宗の聞き方』に書かれているとおりに説いたであろう。

この本は，山下義信を理解するために欠かすことができないものであるが，それ以上に，宗教者山下義信が書いた優れた真宗入門書として評価されてもいいのではないかと思う。

注

1）山下義信『真宗の聞き方』善行社，1961年，PP．100－101。
2）同書，序。
3）同書，序。
4）同書，PP．71－73。
5）同書，PP．204－205。
6）以下の広島戦災児育成所の運営方針，特色，今後の方針については，「広島戦災児育成所要覧」広島戦災児育成所，1947年（謄写版刷り）より抜粋。

運営方針
A理念　（1）祖国再建の材となれ
　　真善美聖の創造
　（2）人類救済の天使たれ
B家庭　（1）礼儀正しく

（2）勤勉努力すること　　健全なる中流家庭の躾
（3）慈悲深きこと

C教育　（1）新自由民主教育
（2）孤児感を抹殺する所内学校教育
（3）教育と家庭との一体化の実現

D生活　（1）集団と個の家庭生活との融通
（2）自由独立生活への進展

E宗教　（1）礼拝堂の荘厳
（2）毎朝夕の自由併参
（3）縣下寺院の協力
（4）職員の宗教心の高揚
（5）職員にして僧侶たるもの3名あり

特　色　（1）広島市原爆孤児を収容すること
（2）所内に学校を併置すること
（3）宗教情操に留意すること
（4）中流家庭を標準とすること
（5）事務及寄贈金品を厳正にすること
（6）所長の信念に感激し集り，優良職員を選任すること

今後の発展策

A　世の趨勢に鑑み当所を中心とする総合的社会事業を企画し，乳児の保育授産事業等について計画中である。

B　孤児の将来を考え，その職業教育を兼ねかつ，自活自立の途を講ずるため適当なる事業を経営すべく，職業補導工場については，既に授産場設置の認可あり。目下当局に於いて手続設計中である。

昭和22年の目標（3年目の目標）

第1　**所風の完成**　礼儀正しい家庭　奮闘努力の家庭　慈悲深い家庭の所風をますます発揮すること

第2　**教育の完成**　学校教育の充実（教室の完備学力の増進予復習の奨励）　中等学校への進学　子供図書室の完備　勤労及び職業教育への前進　研究会の設立

第3　**家庭の完成**　優秀なる担任母の養成　各家庭設備の完成　母親教室の精進　家庭躾の向上　家庭経済の確立　家庭娯楽の考究実践　家庭間の交際　家庭と社会の接触

第4　**保育の完成**　託児の開始　炊事の区別　遊戯の増加　保姆の向上　乳幼児の保護開始

第5　**衛生の完成**　掃除の徹底　保健衛生の強化　治療施設の完備　施療の開始　便所塵芥の処理改善　洗面所手洗所の完備　下水溝の改良保温冷凍の設備　所内の風致緑樹化

第6　**栄養の完成**　理想炊事場の完成　食糧物品倉庫の改修　栄養予定の確立　調理法の講習　家庭自炊への前進　材料購入の方法改善　家畜の飼育　原料の自家製造　家庭自給園の完備

第7　**勤労の完成**　所内勤労作業の計画化　児童勤労事業の開始　社会勤労事業への突進　授産場の開始

第8　**福利の完成**　所内売店の新設　職員生活の向上　文化講座の増加　視察の派遣　身上及び結婚の盡力

第9　**事務の完成**　機構の合理化　経費の予算化　文書及び統計の完成　業績の反省　所報の発行　西日本孤児連盟の結成　講習会等の企画　県下感謝（2文字不明）の計画

第10　**設備の完成**　自給農園の確保　温室の入手　寄宿舎の接収　家庭第2棟の建築　乳幼児収容寮の新築　風呂場炊事場便所の新築　食堂の改修　運動場の拡張　茶亭の改築